



早稲  
な

hayaku otonani  
naritaina ♡

for adults

おじやま  
しまーす

あはは  
誰もいないってば  
あがってあがって

マイメロが突然姿を消してから半年、いつまでもよくよとしていても仕方がないと、歌はようやく前向きに歩き始めた。今日は土曜日。父親は末っ子の琴と旅行へ、姉の奏は彼氏とお泊りデート。マイメロへの気持ちは精算してはいたが、さすがに家に一人では寂しいと、美樹を部屋に誘って恋談義に花を咲かせる事にした。

「誰も居ないなら行こうかな」  
家に誰も居ない事を執拗に確認してくる美樹だったが、歌は特にそれを気に留めなかった。



「あら、美樹ちゃんこんにちは。」  
出掛けた筈だった奏が階段を降りて来た。その瞬間美樹の体は硬直し、表情は強張った。  
「あれ？お姉ちゃん、今日彼とデートじゃなかった？」  
「そのつもりだったけど、気分が乗らなくなっちゃった。」  
「ふーん、モテる女は違うねえ、このこの〜っ」  
「後で来なよ」  
奏が美樹に囁いた言葉は、歌の耳には届かなかった。



先程までとは打って変わって、落ち着かない様子の美樹。  
「美樹ちゃん、どうしたの？なんか顔赤いけど。体調悪いの？」  
「えっ？ ううん、平気だよ。ちよっちとおトイレ借りるね〜。」  
よろけながら立ち上がる美樹を見て、明らかに様子がおかしいと思いつつも、何となくそれ以上は聞いてはいけなような気がした歌だった。



「奏さん…は…入ります。」  
 「どうぞ。」  
 美樹がゆつくりとドアを開けると、そこには恥ずかし気も無く裸体をあらわにした奏が立っている。  
 「うふふ…じゃあ今日も始めよっか。」  
 美樹はその光景に言葉を失い、しばらく見とれてしまった。  
 そう。彼女はもう何ヶ月も前から奏に性の手ほどきを受けている。しかし、歌はこの二人の関係を全く知らない。歌が居る時に呼び出されるのは今日が初めてだ。  
 「あ…あのつ…ち…違うんですっ！今日は歌ちゃんも居るし…だからです…出来ませんっ！」

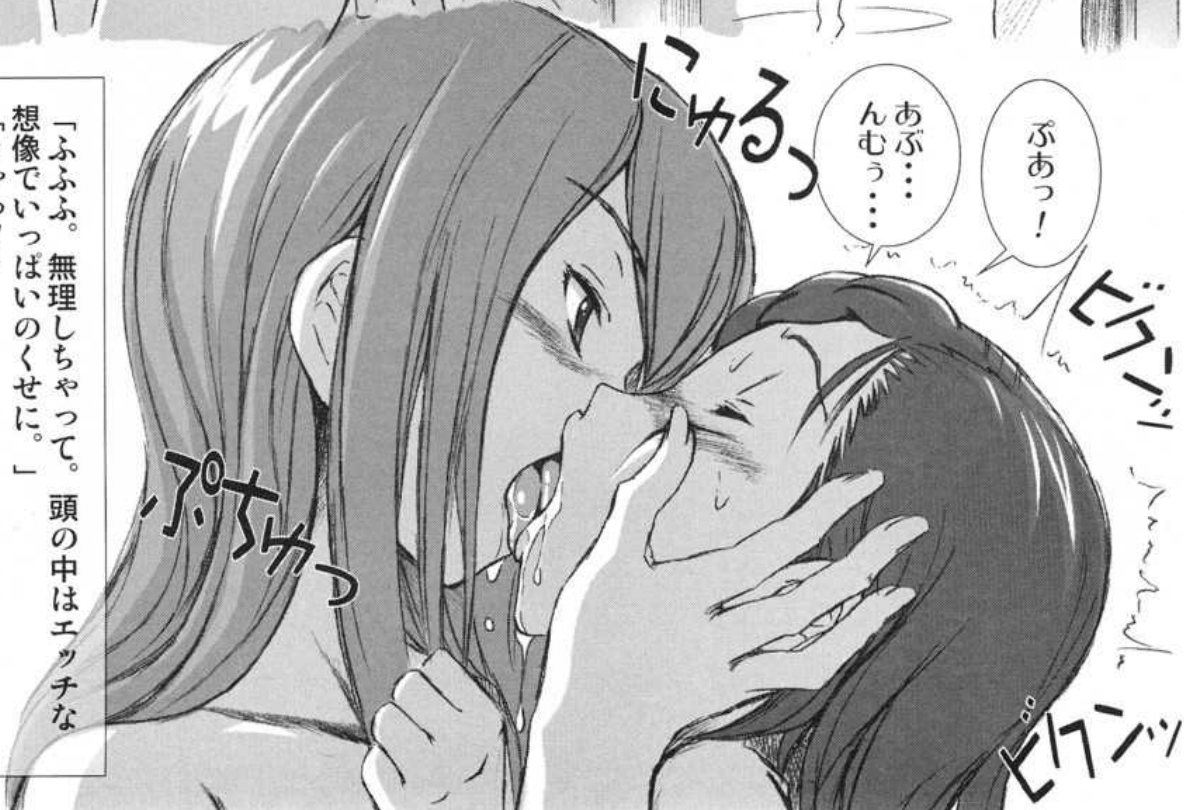


うふふ…  
 久しぶり。

さあ、  
 いらっしやい。



あ…



ぶあつ！

あぶ…  
 んむう…

にゅる

ぶちゅっ

「ふふふ。無理しちゃって。頭の中はエッチな想像でいっぱいなのよ。」  
 「きゃっ!!」  
 奏は美樹の顔を強引に引き寄せ、閉じた口に舌をねじ込んできた。その濃厚な舌使いに体からみるみる力が抜け、もはや抵抗すらできない。(どうしてだろう…今日はいつもより何倍も気持ちいいよお…)  
 キスだけでイッたのは初めてだった。

「それ…めくって見せなさい」  
美樹は、すぐその部屋で歌が自分を待っている事を  
頭では解かっていたのだが、どうしても湧いてくる欲求を  
抑えることが出来なかった。

もじ…

もじ…

現に美樹の下半身はもう、  
ショーツでも吸収しきれない  
ほどたっぷりと濡れていた。  
この数ヶ月で彼女のあそこは、  
奏と会うだけで反応してしまう  
ように出来上がっていた。  
もう後先の事は考えられ  
なかった。その綺麗で長い  
指先で、自分の汚くて  
いやらしい部分をさすって  
欲しいという想いで  
…

あああ…

うわっ何これ  
ありえないよ  
こんな濡れ方…

はあ  
はあ

くっ

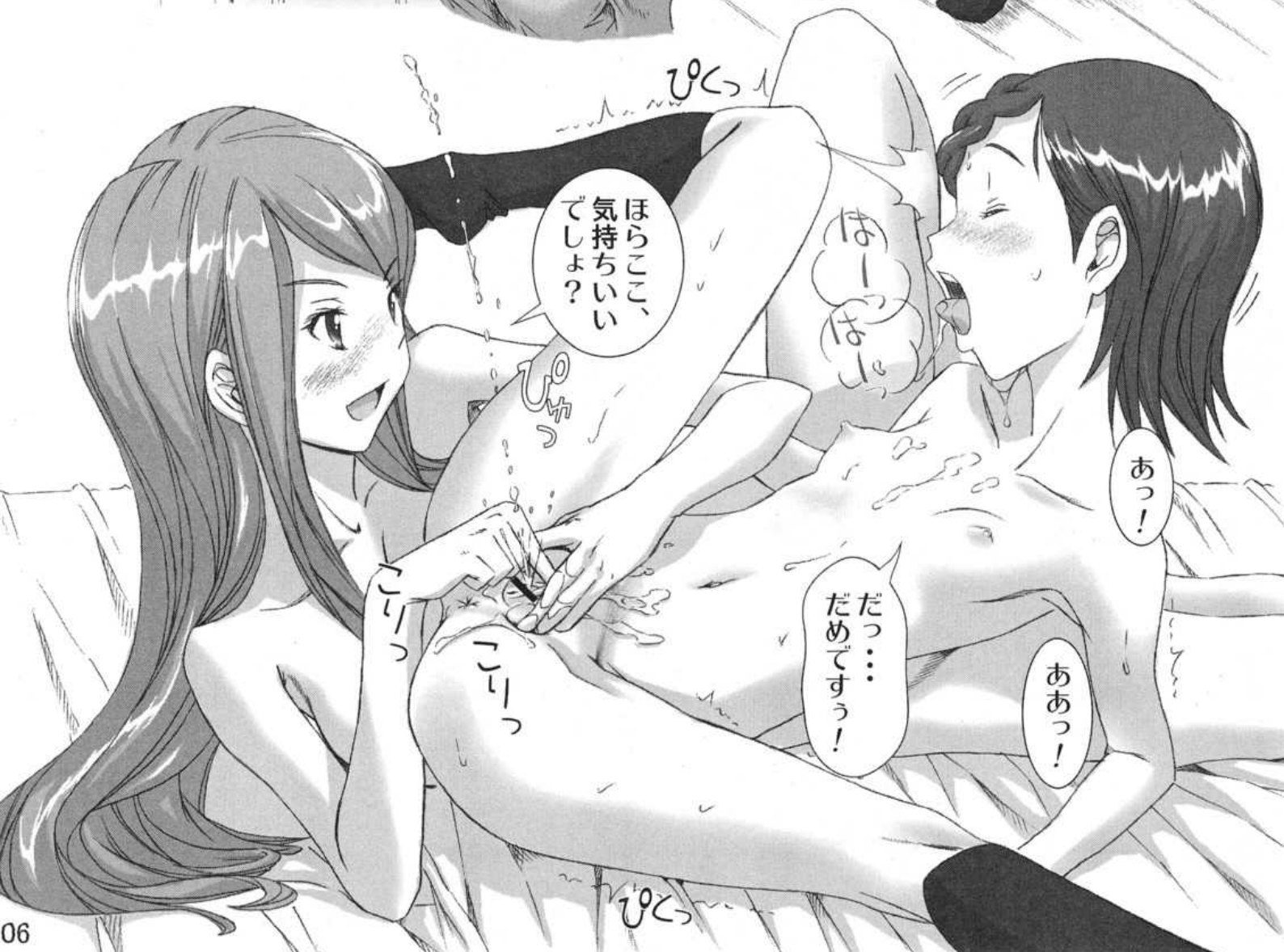
(美樹ちゃん、トイレにしては遅いなあ：やっぱり体調悪いのかなあ：。)

美樹が席を立ててから二十分が経っていた。さすがに変に思った歌は少し心配になり、取り敢えず様子を伺って来ようと部屋を出た。

階段を降りようとしたその時、姉の部屋から何やら悲鳴に似た声が出た。聞き慣れない声に歌は不安を感じ、恐る恐るドアに近づいた。

「お姉ちゃん？」

ドア越しに呼びかけたが、今まさに絶頂を迎えようとしている彼女に、聞こえる筈もなかった…。





ほら…  
二本目も簡単に  
入っちゃったよ？

あっ!!  
歌ちゃん!!

うふふ…

しゅっしゅっ  
しゅっしゅっ

びくっ  
びくっ

びくっ

だ…め…  
歌ちゃん…!!  
見な…いでえ

ドアを開けた歌は、自分の目を疑った。さっきまで一緒にいた美樹が、なぜか裸になり、これまた裸の姉にアナルを攻められながら、あそこを濡らしている。歌の思考は完全に麻痺し、そこに呆然と立ち尽くすことしか出来なかった。二人は歌の存在に気付いたが、奏はその行為を止めるどころか、歌に見せ付けるように美樹のあそこをぱっくりと広げ、クリトリスにローターを押し付ける。美樹は歌の目の前で尿を勢いよく噴き出しながら小刻みに痙攣を繰り返していた…。

「ピンポーン」  
インターホンが鳴った。  
「入ります…」  
鍵をあげ階段を上がって  
きたのは同級生の小暮  
だった。小暮はそこに  
いた歌を見て、かなり  
困惑している様子だった。

小暮…

ゆ…夢野っ

「あら小暮君、早かったわね。  
我慢できなくなっちゃった？」  
奏は小暮の顔を引き寄せ、  
汗ばんだ胸の谷間に押しあてた。  
「か…奏さん…誰もいない  
はずじゃ…」  
力なく発した小暮の問いは無視  
された。  
そして奏は、おもむろに彼の  
パンツを降ろし、ペニスを  
しごき始めた。

あたしのお気に入り♡

はあ  
はあ

見てよ歌  
このデカくて長い  
チンポ、それに  
この硬さ！

だめだよ奏さん…  
夢野が見てるよお

歌は次々と起こる異常な  
出来事にどうしたらいい  
のか解からず、ただ驚き  
呆気にとられるばかり  
だった。  
「な…何なのよもー!!!」  
男性の射精を初めて、  
しかも間近で見てしまった  
歌は、そう叫んで部屋に  
戻ってしまった…

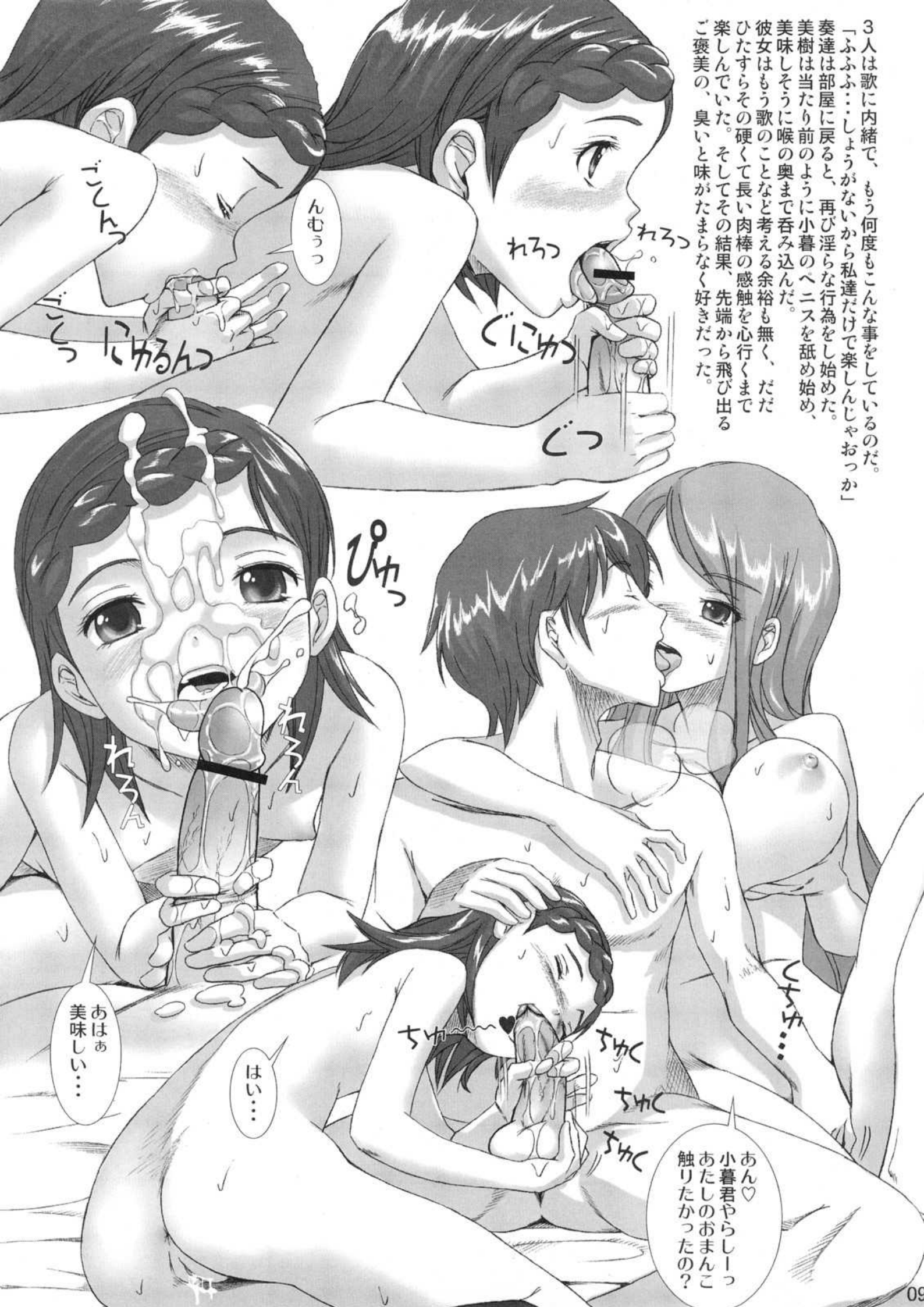
えっ!?

えっ!?

はあ  
はあ

しゃん  
しゃん  
しゃん

3人は歌に内緒で、もう何度もこんな事をしてるのだ。  
 「ふふふ……しようがないから私達だけで楽しんでおっか」  
 奏達は部屋に戻ると、再び淫らな行為をし始めた。  
 美樹は当たり前のように小暮のペニスを舐め始め、  
 美味しそうに喉の奥まで呑み込んだ。  
 彼女はもう歌のことなど考える余裕も無く、ただ  
 ひたすらその硬くて長い肉棒の感触を心行くまで  
 楽しんでた。そしてその結果、先端から飛び出る  
 ご褒美の、臭いと味がたまらなく好きだった。



んむっ

れろっ

ぐにゅ

じっ

ひゅっ

れろん

はい……

あはあ  
 美味しい……

あん♡  
 小暮君やらしーっ  
 あたしのおまんこ  
 触りたかったの？

ちゅっ  
 ちゅっ  
 ちゅっ  
 ちゅっ

ちゅっ……



そんな美樹でも、唯一  
貞操だけは守っているのだ  
そのため小暮にはこれまで  
アナルばかりを犯され続けて  
来た。しかし彼女の小さな肛門  
では小暮のそれを充分に受け入れる  
ことが出来ずにいた  
「美樹ちゃん、あれからちゃんと  
練習してた？」  
「あっ…はい…」  
美樹は自らパイプをアナルに  
差し込み慣れさせた後、小暮の  
ヘニスを深々と挿入して見せた

こんなに  
入っちゃったあ♡

ひびく

はあ

はあ

はあっはあっ  
奏さん見てっ

ん…

にやるっ

ぽて

ウフフ…  
じゃあもうお尻は  
卒業だね♡…

え？

あ…

しかし、今日の奏を満足させるには、それだけでは  
物足りなかった。奏は美樹の体を軽々と抱きかかえると、  
小暮に目配せをした。  
「奏さん、本当にいいの？」  
彼は何かを知っているようだった。何も知らない美樹は、  
きよとんとした表情で奏に身を任せている。

ぢぽん

ひぐううう~~~~!!!

ぐにやう

びゅんびゅんびゅん

んん!

ぐいっ

美樹：…俺たちやっと一つになれるよ…

ちよっ…だめっこれは先輩のために…

うっす…すこいよ美樹…

「美樹：俺、実は今日おまえのここに入れてくれるって聞いて来たんだ…。」  
小暮はそう言うと、ペニスの先端を美樹の割れ目に強く押し付けてきた。  
彼女は結局大した抵抗も出来ずに、小暮に貞操を許してしまった。  
彼の太い肉棒を突然無理矢理ねじ込まれた彼女は、あまりの出来事に焦点の定まらないポオッとした表情で力なくうなだれている。  
その痛みから時折起こる痙攣は、小暮のペニスをより一層締め付けた…。

びくんっ  
びくんっ

やっさ

やっさ

うわ…  
こんな…

その頃歌は、部屋で一人泣いていた。今まで聞いたことも無かった美樹の卑猥な声や、間近で見せられた小暮の射精が、彼女の頭の中で幾度も鮮明に映し出される。今も姉の部屋では自分の想像もつかないような事が繰り広げられている…。そう思うと、鼓動は高鳴り、体は熱くなった。歌はふと自分の恥部に手を入れてみた。「何？これ…」歌の下着はぐっしょりと濡れ、その中身はまるで、ハチミツでも塗らたくったかのようにヌルヌルしていた。彼女はツンと膨らんだ豆の部分を指で丁寧に擦りながら、何度もイッてしまった…。

ぬる…

エッチぐらい  
できるもん…

あたしだって…

はあっ

はあっ

ちゅ…  
ちゅ…

いける

ピョ

ピョ

はあっ

夢野？  
あつ…

(カチャッ)突然ドアが開いた。  
鍵を閉め忘れた！そう思った時にはもう  
遅かった。そこにはチンポを  
ピンピンに勃起させた小暮が  
立っていた。オナニーに夢中  
だった歌も、すでに全身裸に  
なっていた。

わあっ

「夢野っ！よかったあつ俺も同じ気持ちだよおっ！」  
「ちっ!!ちがつ!!こ…これはその…うぶうっ!!」  
小暮は歌の口めがけてチンポを思いっきり突っ込んで来た。  
歌は自分の喉奥で彼の生暖かいカリが前後しているのを  
感じていた…

んく…

うぶっ  
ぬっ  
ぬっ

かはっ

どくん

びやる…

歌のおまんこ…  
ヌルヌルしてる…

ほろっ

ち…違うのおっ  
これは…ああ

げほっ

「夢野の口、すごく気持ちいいよお…」  
歌は自らにも負い目があったか、もう今更  
怒る気にもならなかった。

ザーメンの独特の臭いが  
鼻を刺激した。  
どこか遠い異世界に迷い  
込んでしまったかのような  
気分になっていた…

んっ!

そこへ奏と美樹が…いや、そこにいるのはもはや美樹ではなく、一匹の従順なメス犬だった。しかしそれよりも歌は今、自分の事で精一杯だった。

あら、お取り込み中にごめんなさい

うちのワンちゃんがザーメン臭いって吠えるもんで♡

何？小暮？ダメだよ？無理だよ？そんな…

今まさに彼女の中へ小暮の肉棒が注入されようとしていたのだ。その先端は窮屈そうに割れ目の入り口で止まっている。

ふる

ふる

そ…そんなの入らないよ？

ぎゅ…ぎゅ

うわ…きつ…

んぐうっ！

ひぎいいいいい  
~~~~~  
!!!

彼女の説得も空しく、小暮のチンポは一気に根元まで突き刺さった。その瞬間、彼女の体中を言い用の無い激痛が駆け巡った…!

ぶちやっ！

しかし思いのほか、その痛みはすぐに引いていった。換わりにこれまで経験した事も無いような快感が、歌の全身を覆った。彼女はもう何もかも真っ白になり、ただ規則的に出入れられる物体の脈動だけを感じながら、何度も何度も果ててしまった…。

夢野お  
ああ…

ふああああ~~~~

さすがね…  
もうあんなに  
気持ち良さそうな  
顔してる…

みきもお…  
ぴゅっぴゅっ  
できるよお♡

夢野お…  
夢野お…

ああ…

あ…

歌の膣内に、精液を何回も  
発射する小暮。  
もうどれだけ時間が経った  
のだろうか。彼のペニスは  
依然として勃起したままで  
いる。

うう…

ぴく  
ぴく

突然小暮は、彼女の割れ目の上に  
ある小さく狭い穴を無理矢理広げ、  
そこへ亀頭を強く押し込み始めた。

だっ だめえっ！  
そ…そこっ  
入れるとこじや…

ふえ？

次はこっちの  
穴に…

きゅー  
きゅー  
きゅー

小暮はゆっくりと、確実に歌の  
アナルの奥へとペニスを挿入  
していった。歌の肛門括約筋は  
肉棒が奥へ入ろうと動く度に、  
歌の意思とは関係なく激しく  
反応してしまう。  
もはや暴走した小暮を止める  
手立てなど無かった…。

すごいよ…夢野の  
お尻、きゅつきゅっ  
って締まって  
超気持ちいいよお

いやあああんっ！！

びゅん!

びゅん!

びゅん

ぱくっ



あああああ  
あああああつ!!

びしょびしょ  
どくどく  
びしょびしょ



歌ちゃんっ  
マイメエロ、帰って来た。  
半年前、歌ちゃんの  
お父さんが美味しそうに  
ワインを飲むところを  
見て、歌ちゃん、私も  
早く大人になりたいな  
って言った。

マイメエロ、歌ちゃんの  
心の音符、見えた。  
だからマイメエロ、  
マリールランドで  
たくさんたくさん  
おねがいしてきたよ♡

歌ちゃん、大人に  
なれたかな？



うーたー  
ちゃん♡





このおまんこなら  
何回でもいけるよ

はーい  
上がってー♡  
上がってー♡

うおおっ  
アナルが締まって  
来る〜っ!

あはあ♡  
ビュッビュッ  
ビュ〜♡

歌ちゃん…  
すごくイイよ

えへ♡  
いっばい  
出してね♡

ほら美樹ちゃん  
舐めて…

何だこのまんこ  
超キツイぞ

ありやりや…  
マイメエロ、  
失敗…

### 奥付

読んでいただき  
ありがとうございました〜!

発行: pocca

著者: 乃良紳二

URL: <http://homepage2.nifty.com/pocca/>

発行日: 2007.6.3

印刷所: しまや出版

この本の無断転載、複製、配布を禁じます。



あは♡  
マイメロっ  
おかえりい♡

びゅーっ♡

びゅーっ♡



# 早丸に なりなほ♡

hayaku otonani  
naritaina ♡

"おねがいマイ×ロティ" fan book  
presented by poooca  
<http://homepage2.nifty.com/poooca/>  
june 3, 2007